

モーニング・コール

ベルの音が高く鳴る

夢うつつに モーニングセットしておいたことを思ひ出す

「オメザメノオジカンデス」

女の声がくりかへして言ふ

自分で目をさますやうにしないと全く不愉快な思ひをする

シャツを着ながら考へる

(正しくは「オメザメノオジカン」ではない

「オメザメニナルオジカン」

「オメザメニナルトアナタガシテイサレタオジカン……」)

白い壁にぶら下つた鏡の中の僕の顔

電話局の方では先刻承知で

神経の細い人間に精神的抵抗感を与へることにより早目に社会感覚をとりもどさせるとい

ふのかもしれない

窓からは街の屋根の上を晩秋の風が渡つてゐるのが見える

身仕度を終へ 廊下 エレベーター フロント

ガラスの自動ドアから外へ出る

ビジネスホテルの前の並木道

ある朝こんなこともあらう

「オナクナリノオジカンデス」

その時も 僕は同じやうにカバンを持ち

枯葉の吹き散る道に歩を踏み入れる事になるのだらう